

# 「目から鱗が落ちる」経験を - チャペル・アワーへの招き -

舟 木 讓

私たちが日頃当たり前のように使用している「目から鱗が落ちる」「豚に真珠」という表現はどこから来ているのでしょうか。あるいは三三九度を交わして神主さんの前で結婚式をあげるといった日本の「伝統的」な儀式が始まったきっかけはなんなのでしょうか。発砲ワインの代名詞にもなっているシャンパンを最初に作った人は誰なのか、紀元後を表すA・Dとはどういう意味なのか、終末期医療のホスピスとは本来何を意味する言葉なのか、日本語の「愛」という言葉が現在の肯定的な意味に用いられるきっかけは何か、ローマ字が誕生するきっかけは何だったのか等々、このような疑問を解く鍵が、実はキリスト教の思想と文化、また歴史の中にあることが関西学院大学の学びで知ることが出来ます。

このことは大学の学びの中のほんの一例ですが、大学での学びや生活、そして様々な出会いは、私たちが日頃当たり前と思って見過ごし鈍感になっている様々な物事をもう一度新鮮な心で捉え直していくことへと導いてくれます。人々がすでに与えてくれた答えをそのまま無意識・無批判になぞるのではなく、多くの先達の遺産を大切にしながらも、その背後にある問題の本質や歴史に迫り、そこから自分が納得するような新たな答えを自ら探し求め、発見し、創造していく、それが大学生生活の醍醐味です。大学では、そのための様々な機会を提供しています。その中でも関西学院の持っているユニークなプログラムの一つがチャペル・アワーという時間です。授業期間内、1時限目と2時限目の間30分間という短い時間ですが、毎日どこかで様々なプログラムが複数行われています。

キリスト教的な行事というと何か堅苦しく、一つの宗教的価値観を一方的に押し付けられように感じるかも知れません。しかしここではキリスト教を信じる者だけでなく、幅広く様々な人々が、学生・教職員の枠を越えて何かに出会い、社会・文化・歴史・宗教・科学・倫理・人間、そして私自信を深く掘り下げることを目指してプログラムが展開されています。

大学生活という貴重な時間、最初に述べた様々な問いかけに対する「トリビア的」な答えを獲得するだけでなく、自らの生き方に自らが主体的に目を向ける機会としてチャペルをはじめとした関西学院独自のキリスト教プログラムを体験して頂きたいと切望します。

(経済学部助教授・宗教主事)